

## 従来法を活かした AS への貢献 -グラム染色と培養同定を中心に-

◎口広 智一<sup>1)</sup>  
公立那賀病院<sup>1)</sup>

臨床検査技師による Antimicrobial Stewardship (AS)への貢献として必要な項目の一つとして、微生物検査の迅速結果報告がある。薬剤感受性試験の最終結果を待たなくても、検査途中の菌種推定により、ある程度有効または無効な抗菌薬を推測することが可能となることから、グラム染色や簡易同定検査による菌種推定は大変有用となる。特に迅速報告が有用となるのは適切な抗菌薬治療を要する重症感染症のケースであり、これらには重症敗血症などの血液培養陽性例、細菌性髄膜炎症および敗血症の感染源と推測される検体などが挙げられる。このような症例では、できる限り早期に迅速な菌種推定を実施し、有効と推測される抗菌薬治療への変更が必要である。グラム染色による鏡検は非常に迅速性に優れており、初期抗菌薬の選択においても大きな力を発揮するため、必要不可欠な検査である。しかしながら、グラム染色の鏡検だけでは抗菌薬選択に繋がる詳細な菌種推定が難しい場合も多々存在する。そこで有用となるのが簡易同定検査である。簡易同定だけでは菌種決定が不十分と思われがちであるが、詳細な同定を実施しなくても菌種同定が可能なケースは少なくはない。エビデンスに基づいた簡易同定を実施するツールとして、CLSI M35-A2 ドキュメントを利用することが有用である。グラム染色とこれらの簡易同定を組み合わせることで、最終結果を待たなくても多くのケースで早期に菌種推定が可能となる。血液培養陽性症例では、培養陽性液を用いた自動機器による直接同定を実施する方法も有用ではあるが、簡易同定だけでも十分なケースも多々ある。これらを踏まえて、今セッションにおける AS に貢献できる有用な事項として、1.血液培養陽性検体のサブカルチャーの夜間休日実施、2.各種耐性菌スクリーニング培地を併用した培養検査、3.エビデンスに基づいた簡易同定検査の活用、を推奨したい。夜間休日の当直者による血液培養陽性検体のサブカルチャー自体は手技としても難しいものではないため、近年導入施設は増加傾向にある。これにより翌朝に発育コロニーを用いた簡易同定検査が有用となるケースが増加するため、菌種の迅速推定が可能となる。これに併せて耐性菌スクリーニング培地を使用すれば、より有用な薬剤感受性情報を迅速に発信することができる。本シンポジウムでは当院での運用事例を交えながら、グラム染色や簡易同定などの従来法の活用による AS への貢献を紹介していきたいと考える。